



.....
 監督＝ロジャー・ドナルドソン
 監督／出演＝アル・パチーノ／
 コリン・ファレル／ブリジット・
 モイナハン（ブエナ ビスタ
 インターナショナル配給／
 2003年アメリカ映画／115分）

「CIA」へ「リクルート」された主人公コリン・ファレルとそれを鍛える教官アル・パチーノとの師弟の激突。そしてそこに絡む美しい研修生。「何も信じるな！」という「教官」の言葉が実にピッタリの騙しあい（？）テクニクは見モノだが……。

♣ リクルートという言葉

ここ数年、日本では経済不況のあおりを受けて、就職難の状況が続いている。日本ではリクルートという言葉が一時よくはやったが、それは就職情報誌を出版する「リクルート社」が一躍有名になったからだ。

すなわち、リクルート社の知名度が広がるにつれて、会社に就職すること＝リクルートと一般的に表現され始めたのだ。また、「とらばーゆ」（転職）という言葉も一時はやったが、これは1980年代に創刊された雑誌「とらばーゆ」の影響によるもの。

そんな中、1988年、リクルート社には「リクルートコスモス株」の上場をめぐって、元閣僚を含む数多くの国会議員に株式を譲渡したという「リクルート事件」が発覚し、「ロッキード事件」と並ぶ大疑獄事件に発展した。

このような社会情勢の展開の中で、その後次第に就職活動＝リクルートという図式は失われ、それとともにリクルートという言葉そのものが使われなくなってきたようだ。

パンフレットに、「リクルートの重層性」と題して作家の有栖川有栖氏が書いているように、英語の「RECRUIT」とは、もともと「新兵を募集する、補充する」という意味であって、大学生の就職活動を意味するものではない。したがってこの映画の原題『THE RECRUIT』は、日本でいう就職活動＝リクルートというニュアンスとはだいぶん感覚が違うはずだ。

だから日本人の観客は、まず1970～80年のリクルート社の就職情報誌全盛時代に使われていたリクルートという言葉の理解でこの映画を観たのではダメ、ということをよくおさえておく必要がある。

CIAからのリクルート

アメリカの「就職事情」はよく知らないが、この映画の主人公ジェイムズ・クレイトン（コリン・ファレル）は、マサチューセッツ工科大学（MIT）に在学中、既に自分で「スパルタカス」というコンピュータ・プログラムを開発したほど優秀な学生だから、就職は思いのままという感じ。本人も自信たっぷりだ。ところが、そんなジェイムズに、CIAのベテラン教官ウォルター・バーク（アル・パチーノ）が近づき、何と、「CIAも優秀な人材を求めている」としてささやきながら、積極的にCIA「カンパニー」への「勧誘」活動を展開した。

入社試験はホント？

まずはCIAの入社試験。これは、普通の企業と同じような筆記試験。その受験生は何十人もいる。ただ普通と違うのは、試験を受けている様子をモニターで映し出し、それをバーク等がチェックしていること。カンニングも見事に摘発だが、果たしてこんな試験風景はホントの姿かいな……？

この受験風景のシーンを撮った本当の狙いは、きっとジェイムズと美しい受験生レイラ・ムーア（ブリジット・モイナハン）との「出会い」をセットするためだろう。彼女は、過去、『コヨーテ・アグリー』（00年）、『トータル・フィアーズ』（02年）に出演した女優だが、私はあまり印象に残っていなかった。しかし、この映画ではかなりの美人。十分な存在感を見せてつけている。

ジェイムズは別にCIAに興味があるわけではないが、父親の「不審の死」が

CIA と何らかの関わりがあることをバークから暗示され、さらにベテラン教官らしく、ジェイムズの心理を巧みに読みながら勧誘するバークのテクニックの前に降参。「カンパニー」(CIA) への「入社」を決めた。

ファームでの特別訓練もホント？

筆記試験でどのように選抜されたのかはわからないが、ジェイムズもレイラもこれを見事にパスし、次はメインの「ファーム」と称される CIA の特別訓練基地での訓練だ。ここではまさにバーク教官の独壇場。何ともイキイキとした表情で研修生たちを教育・指導している。

彼が話す言葉の一つ一つには十分な説得力があるし、「何も信じるな——親友も、自分の五感でさえも」という言葉にもすごい重みがある。そして大切なことは、ここでやることは「すべてがテスト！」ということ。「情報」がすべての価値に優先する「CIA」という組織は、誰も信用してはならないうえ、友人同士の信頼や男女の愛情さえもすべて仕事のために利用しなければならないという「非情の世界」なのだ。

これはあたかも日本における「忍びの者」の世界と同じ。村山知義の小説を映画化した山本薩夫監督、市川雷蔵主演の名作『忍びの者』(62年)を思わず思い出してしまった。

ファームでの訓練の中、次第にそれを頭で理解させられ、身体で覚えさせられていくジェイムズやレイラ達。そんなジェイムズを、バークが「実践配置」につける日がいよいよ近づいてきた。

レイラは二重スパイ？

バークがジェイムズに与えた実戦でのミッションは、「レイラは二重スパイ！ 彼女を泳がせて誰と連絡をとっているかを探れ！」というもの。いやはや、つらい訓練の中でせつかくレイラといい仲になっているジェイムズに対して、何とも過酷な任務だ。

しかし、根が真面目で優秀なジェイムズは、懸命にこの任務を遂行。次第にレイラの欺瞞性と二重スパイ性が明らかに……？

🎬 最後のどんでん返しは……？

私は2003年12月5～8日、愛媛大学法文学部で4日間の「都市法政策」の集中講義を行ったが、その中で、地方分権や日本の民主主義のあり方というテーマでは、『ラスト・サムライ』（03年）の映画ネタを活用して大いに喋った。学生諸君は、私が喋る映画ネタを非常に気に入り喜んでくれたが、講義終了後の自由感想の中では、『ラスト・サムライ』のストーリーを喋りすぎ！「ネタばらしはダメ」という「文句」がいくつか見られた。たしかにそれはそうだ、と私も反省。その反省の上に、この映画でのその後のストーリーと最後のどんでん返しは、書かないことにしよう。

それを書いたのでは、この映画を観ようとする皆さんの興味が半減してしまうだろうから……。

🎬 師弟愛をテーマとした映画に新たな1ページ

男同士の師弟愛を描いた近時の名作は、『スパイ・ゲーム』（01年）と『ハンテッド』（03年）の2本。『スパイ・ゲーム』は師弟愛が貫徹される美しいドラマだが、『ハンテッド』は師弟愛が引き裂かれ、師弟対決となる苛酷なドラマ。CIAにリクルートされた新入生ジェイムズとCIAのベテラン教官パークとの師弟愛は果たしてそのどちらのパターンに属するのだろうか？

少なくとも前半はいい関係。厳しい教育環境の中で、すばらしい教官とすばらしい弟子との間に信頼関係そして師弟愛が形成されていく様子はすごくグッド。しかし……？

ベテラン俳優と将来が囑望される若手俳優の2人をうまく売り出すには、「師弟モノ」は絶好の素材。この『リクルート』という映画は、その「師弟モノ」に新しいページを刻んだことまちがいない秀作だ。

2004(平成16)年2月2日記